

## 「タフネゴシエーター」

増山雄三

「坂本龍馬（一八三五～一八六七）」の龍馬は通称で、実名は「直陰（なおかげ）」といい、土佐郷士だった坂本八平の、次男として十一月十五日に生まれたが、この日は彼が暗殺された日でもあり、高知市上町の彼の生家の前で、全国から集まった龍馬ファンにより、今でも「誕生祭」が開かれている。

幼少時は、落ちこぼれなどと言われていたが、剣道の日根野道場に通うようになってからそれが変わり、そこで、小栗流兵法目録を伝授されたあと、江戸へでて「北辰一刀流千葉道場」に入門し、剣術修行を重ね、千葉道場の塾長を任されるに至った。

文久二年（一八六二年）の二十七才の時、土佐を脱藩したあと各地を転々とし、軍艦奉行の「勝海舟」を暗殺しようと、氷川町の屋

敷に向かうも、海舟の話を聞いて感銘し、その場で弟子入りを志願し門下生となり、それが、彼のその後が歩んだ人生にとって、極めて重要なものになった。

さて、坂本龍馬を語る時、従来は、土佐藩の脱藩浪士ながら、反目しあう薩摩藩と長州藩を仲介し、「薩長同盟」を成立させ倒幕の道へと導き、明治国家の政策の柱となる「船中八策」を提起し、幕末の政治に大きな影響を与えたと言われている。

それが今では、それに加え、彼は薩摩の西郷隆盛と長州の木戸孝允らの重要人物を結びつけただけではなく、同時に、幕府側とも別途にネットワークを築いていた、いわゆる、「ネゴシエーター（交渉人）」としての役割が大きかった、とされている。

そんな坂本龍馬が、明治維新の立役者だったというイメージは、一体いつ作られたのかといえ、それは、司馬遼太郎の代表作である「竜馬がゆく」に影響されたというのが、

今では大方の通説になっている。

同署が刊行された、一九六〇年代は、高度経済成長の真ただ中で、敗戦から二十年を経て、国民は自信を求めている、一介の浪士が巨大な「敵」の幕府に挑む姿に、読者は、「こんな凄い奴がいたんだ」と驚き、龍馬の魅力にひかれていったのだ。

龍馬の有名な書簡の一節に、「日本を今一度せんたく（洗濯）いたし候」というのがあるが、それは一見、龍馬が幕府を倒し新しい世界へ導くような印象をもつが、一部の学者は、書簡の前後を読めば、倒幕というような大それた意味はなく、当時の幕閣を一掃しようという意味でしかない、ともいう。

それで近年、長州の木戸孝允をはじめ、薩摩や幕府側の要人の書簡を分析することで、史料に忠実な「龍馬像」が描かれようとしていて、龍馬最大の功績ともされる「薩長同盟（盟約）」についても見直しが進んでいる。

このとき長州は、一八六四年の禁門の変に

よって、会津と薩摩藩などとの戦いに敗れて朝敵となり、その後、幕府は長州を追討し、追い詰められた長州は六六年、龍馬の仲介で薩摩と会談の場を設けるというのは、まさにドラマで描かれている通りだ。

それは、討幕へとつながる重大な局面として、龍馬が朝敵となった長州を救うため、西郷隆盛を説得して、同盟を締結させるという場面だが、「そのように浪花節の世界ではない」と話すのが、落合明治大学教授だ。

この会談には、薩摩は西郷だけでなく、家老の小松帯刀といった藩の上位者が出席し、厳しい駆け引きが行われたが、落合教授は、「組織同士の会談であり、浪士である龍馬一人の力が、決断に影響を与えることは、まず考えにくい」というのだ。

長州にとって、同盟締結の意義は、薩摩が長州と幕府との戦争で、後方支援をするとの約束を取りつけたということであり、これを成し遂げた木戸孝允の、藩内での権限は拡大

していくことになった。

また、龍馬が二院制議会に基ずく、国家体制などを提起する「船中八策」は、後世の創作との指摘もあり、先の落合教授も、「それは恐らく龍馬が考えていたことを盛り込んで作られた『偽文書』だ」と話している。

とはいえ、龍馬の活躍が否定されたという訳ではなく、それは、評価される点が変わり、近年に強調されるのは、「タフネゴシエータ」としての役割で、落合教授は、「同盟の成立に、龍馬が一人で関わったという訳ではなく、会談を行うため、初動の段階で彼が仲介したのは事実だ」とも指摘する。

というのは、薩長の双方に信頼され、折衝できる人物は龍馬の外におらず、彼の仲介がなければ、この同盟が結ばれる可能性は低かったと言えるし、薩長が結びついた事で、幕府への対抗勢力が盤石になったからだ。

さらに教授は、よくも悪くも、その後の日本政治を主導していくことになる、薩長の基

盤づくりにも、龍馬は大きな役割を果たしたというのは事実である、と付け加える。

また、彼は薩長のみならず、勝海舟のような幕臣ともつながっていて、そのネットワークは他の同時代の比でなく、残された色々な書簡からも、龍馬の人懐こさや人望の厚さが伝わってくるのもいい、ドラマで見せる、彼の人を引き付ける姿は、本物の龍馬の姿と、そう遠くないのかもしれない。

ところで、その龍馬は、政府の目を逃れて暫く潜伏していたが、一八六七年、京都の醬油屋である「近江屋」で殺害されたが、そのとき龍馬は、土佐藩邸に近い近江屋の二階にいて、仲間の中岡慎太郎と火鉢を挟んで、新選組対策を相談していた所へ賊が押し入り、脳漿を噴出した龍馬が奥間で斃れ、中岡は隣の部屋で倒れていたが息を吹き返し、この顛末を堺の陣屋へ報告するよう頼んだものの、翌々日になって息を引き取った。

犯人については、新選組犯行説や薩摩藩黒

幕説など、様々な説が唱えられてきたが、ただ、研究者の間では、幕府の治安維持組織である、「京都見廻組」の犯行であったことは定説となっており、痕跡らしいものは残されていないが、その根拠となるのは、見廻組の隊士で、実行犯の一人だった今井信雄が、事件の約三年後、明治政府から取調べを受け、その時に作成された供述調書がある。

「竜馬暗殺」の著者で歴史作家の桐野作人さんは、「今井は供述で見廻組の龍馬殺害を認めている。しかも任意の供述なので、疑う余地は全くない」と話している。

ほかに、近江屋襲撃に参加した見廻組の渡辺篤が、事件から十年ほど後に作成した覚書に、「見廻組が龍馬を殺害したと書き、今井の供述を補強しているが、英雄らしい最期を迎えさせたいフアンの心理が、一筋縄ではないかない暗殺を巡る物語を、あるいは作りだしたのかも知れない。

令和二年十月